

「南スーダン」の課題
(2015年9月10日・AJ研究会)
篠田英朗 (東京外国語大学)

現下の課題 (IGAD-PLUS) : ジュバ非武装化、権力分掌、連邦制の導入?

現下の課題 (国際社会の政策) : POC、制裁、腐敗対策、紛争予防、社会経済開発 . . .

*

「南スーダンの課題」⇒「南スーダン」という長期的課題

アラブ・イスラム、欧州帝国主義、国連/アメリカの支配の奥地

21世紀主権国家システム・資本主義の奥地

*

「スーダンの領域的境界を定めたのは、フンジュ・スルタン (Funj Sultan) 国 (ナイル河流域に16世紀に成立) とダール・フル・スルタン (Dār Fūr Sultan) 国 (西部に17世紀に成立) を征服し、1821年には「エジプト領スーダン」を作り上げたエジプトのムハンマド・アリー (Muhammad 'Alī) 朝の軍隊であった。 そもそもアラビア語で「スーダーン (ビラード・アッ・スーダーン [Bilād al-Sūdān])」とは、「黒人たちの国」を意味する。それはサハラ砂漠南縁部の大西洋岸から紅海岸に至る地域を指していた。この歴史的な意味での「スーダン」に対して、現在のスーダンという国 (the Republic of the Sudan) が存在する地域は、この「歴史的スーダン」の東端を形成していた「東スーダン」に過ぎなかった。19世紀以前の歴史においては、この「東スーダン」地域には、北部のフンジュ・スルタン国 (権力者が自らを「ムスリム＝アラブ」として描き出し、それ以外の人々を「カーフィル [kāfir] (不信仰者) = 黒人」として蔑んでいた) と、西部のダール・フル・スルタン国 (「フル [Fūr]」(アラブ) の「ファルティート [fartīt]」(黒人) に対する差別構造があった) という、イスラームを国家基盤とした「黒人たちの国」が存在し、あとはディンカ (Dinka)、シルク (Shilluk)、ヌエル (Nuer) といった小集団が、それぞれ独自の政治文化を持って存在していた。

「歴史的スーダン」という広大な黒人居住地域において、アラブ世界と隣接してイスラーム文化との融合性を持った部分を含みこんだ地域が、現在のスーダンという国家が存在することになる「東スーダン」地域であった。そのような位置付けを持つ「歴史的スーダン」内の「東スーダン」が、エジプトという紛れもないアラブ国家によって征服された際、「エジプト領スーダン」という明示的な領域的枠組みが生み出された。「エジプト領スーダン」とは、いわばアラブ世界直轄の黒人居住地域である「スーダン」のことなのであった。

ムハンマド・アリー朝の統治は、「東スーダン」地域に、大きな社会変動をもたらした。重要なのは、重税による伝統的定住農耕地帯の農村社会の崩壊と、交通路の発達による南部の開発・収奪の進展である。これによって離村農民が北部から南部に流出し、商人あるいは輸送業者として商業活動を営んでいくようになった。「ジャッラーバ [jallāba] (移動商

人)」と総称されることになったこのような人々は、西部の牧畜民「バッカーラ [Baqqāra] (牛飼い)」や南部およびヌバ山地 (Jibāl al-Nūba) 住民との間にも密度の濃い接触を持つようになった。ムハンマド・アリー朝による初期の奴隷狩り政策の対象になった西部・南部・ヌバ山地出身の人々は、「ジハーディーヤ [jihādiya]」と呼ばれて政府軍に属したり、「バーズィンキル [bāziṅqir]」と呼ばれた北部出身商人の私兵集団になったりして、奴隷兵士として北部出身者が主導する諸活動の中に組み込まれた。」

<篠田 [2008] より引用>

*

「ヌアーのように、物質文化が非常に単純な民族においては、環境に依存する割合が高くなる。彼らは一般に考えられているよりはモロコシやトウモロコシを多く栽培しているが、しかし、本質的には牧畜民である。・・・彼らは心底から牧畜民であり、彼らが喜んでする仕事は牛の世話だけである。彼らは日常必需品のほとんどを牛に頼っているだけでなく、彼らの世界観そのものが牧畜民のそれである。牛は彼らにとってもっとも貴重な財産であり、牛を守り、また牛を近隣の諸民族から略奪してくるためには喜んで自分の生命を懸ける。彼らの社会的行動のほとんどが牛をめぐるものであることから、ヌアー人の行動を理解したいと望んでいる人への最適のアドバイスは、「牛を探せ」である。

近隣諸民族に対するヌアー人の行動や接触の仕方は、牛への愛着や牛を入手したいという願望と深くかかわっている。それゆえ、アニュアク族のようにあまり牛をもっていない民族に対しては非常に軽蔑的であり、一方、ディンカ諸部族への襲撃は、牛の略奪と牧草地の主導権を握ることがその動機となっていた。・・・

ヌアーは、人間を滅ぼすもとは牛だという。なぜなら、「他のどんなことよりも牛のために死んだ人が多い」からである。・・・

・・・牛のもつ大きな制約、つまりその飼育には広大な生活空間が必要とされるという事実は、紛争解決の取決めが広範囲にわたって認識されていること、換言すれば、広大な領域を包含する部族組織、さらには部族領域を超えた範囲に及ぶ何らかの共同体意識が存在するという事実と表裏の関係にある。

・・・同一部族内の争いとはちがって、他部族との戦いはつねに略奪が目的である。したがって、ディンカに対するヌアーの戦いは、その主目的が富の獲得であるという点において、ほとんどの原始的戦争とは趣を異にしている。・・・事実、略奪によって、彼らはこれまで長いあいだにわたって自分たちの牛を増やし、食糧を補給してきたのである。これは、彼らの性格、経済そして政治構造を形づくってきた一つの条件である。彼らは、戦いにおける技倆や勇気を最高の徳と見なし、略奪はもっとも利益の大きい、しかももっとも高貴な仕事だと考え、ある程度の政治的な含意や統合については、それらを必要なものと考えている。

ヌアーとディンカとのあいだの戦いを、牛と牧草地の関連でのみ説明するのはあまりにも単純な推論であるのは言うまでもない。・・・戦いそのものは構造的プロセスとしてとら

えたときにのみ、はじめてその全容が完全に理解される。

・・・政治集団の定義は、・・・他集団との関連においてはじめて集団として成立するからである。一つの部族分節は、同種類の他の分節に対するとき政治集団となり、そして、こうした諸分節が合同して部族をなすのは、ヌアーの他の諸部族に対するとき、および、一つの政治体系をともに構成している隣接した異民族の諸部族との関係においてのみである。

・・・部族としての価値が作動するのは主として、部族を異にする分節間で、あるいは部族と構造的に同次元にある他の諸集団とのあいだで敵対行為、もしくは攻撃を挑発しかねない行為が行われるときである。部族がまとまって協同的諸活動に携わることはほとんどないし、それに部族としての価値が行動を決定するのは、諸社会関係のうちでも特定の限られた分野だけであって、しかもそれは一連の政治的諸価値のうちのたった一つにすぎず、他の政治的価値のあるものとは矛盾さえするのである。・・・ヌアーの政治集団を、価値によって定義する場合には、その集団内の諸分節間の関係および、ある社会的な状況下における社会組織のより大きな体系の一分節としての集団相互の関係に基づいて定義されるべきで、人々が生活しているある種の固定された枠組の一部として定義されてはならない・・・。分節内の成員相互の接触が多様かつ頻繁であればあるほど、その分節間の敵対意識もより熾烈だということである。」

<E. E.エヴァンズ=プリチャード [1997] (1940年) より引用>

*

「エヴァンズ=プリチャードは、戦いを、ヌエル社会の構造原理そのものととらえた。つまり、彼の民族誌のエッセンスは、居住集団と出自集団の分節的構造におけるプロセスとして戦いを分析したことにあった。」

<栗本英世 [2002] より引用。>

*

「植民地政府は、ヌエルの襲撃からディンカを保護するため、両者を強制的に切り離し、その中間は緩衝地帯として無人にした。民族的な境界は、植民地統治の必要性から創られた側面がつよい。エヴァンズ・プリチャードが調査したのは、境界が創られ、ヌエルとディンカが物理的に切り離された以降であったので、両者の混在や平和的な日常関係は観察不能になっていた。」

<栗本英世 [1999] より引用。>

*

貨幣経済 < 贈与経済

生産力 < 交換 (略奪) (戦争経済)

民族国家 < 分節的集団

*

<分析点>

- ・ 第一次・第二次内戦とは何だったのか
- ・ CPA とは何だったのか
- ・ SPLA とは何なのか
- ・ 「南スーダン」の独立とは何だったのか？
- ・ 13年12月事件は何だったのか

*

<主要問題群（相互に密接に結びつくため便宜的な区分け）>

- ・ 権力問題・・・典型的な PCPS、利益配分をめぐる政治
- ・ 民族問題・・・伝統的な対立の歴史、外部の分断政策（植民国、北）
- ・ 機構問題・・・懐柔制度としての政府機構（軍隊）、贈与としての公務員給与
- ・ 環境問題・・・スッドが持つ意味、交通インフラ欠如と低人口密度
- ・ 資源問題・・・油田、水、牧草、家畜 “intercommunal conflict”
- ・ 国際問題・・・ハルツーム政権、ウガンダ、エチオピア、ケニア、「対テロ戦争」
- ・ 国家問題・・・政府への支援は平和構築なのか？＝国家建設のパラドックス

*

<今後に向けた問い>

われわれは何を目指しているのか？ / 彼らは何を目指しているのか？

21世紀の国際社会における南スーダンという社会のビジョン

⇒入れ子構造の紛争に耐える、入れ子構造の格差を見る

⇒歴史の検証、地理の検証、集団の検証

生活の確立、治安の確立、集落の確立、都市の確立、国家の確立、経済の確立

(⇒とりあえずは地域の世代交代を乗り切るための予防警戒行動)

参考文献

- 篠田英朗「スーダンという国家の再構築：重層的紛争展開地域における平和構築活動」、武内進一（編）『戦争と平和の間：紛争勃発後のアフリカと国際社会』（研究双書 No.573）（IDE-JETRO アジア経済研究所、2008年）、59－89頁。
- 栗田禎子『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』（大月書店、2001年）。
- E.E.エヴァンズ＝プリチャード（向井元子訳）『ヌアー族』（平凡社、1997年）（減点は1940年）。
- 栗本英世『民族紛争を生きる人びと—現代アフリカの国家とマイノリティ』（世界思想社、1996年）。
- 栗本英世『未開の戦争、現代の戦争』（岩波書店、1999年）。
- 栗本英世「植民地行政、エヴァンズ＝プリチャード、ヌエル人」、山路勝彦・田中雅一

- (編)『植民地主義と人類学』(関西学院大学出版会、2002年)。
- 栗本英世「深刻な南スーダン紛争 民族間で殺戮、遠のく国民和解」、『エコノミスト』、2014年2月11日号。
 - 浦上法久「南スーダン共和国ミッション (UNMISS) における自衛隊の活動—オールジャパンによる取組みと民軍連携モデル」、『人道研究ジャーナル』 Vol.3、日本赤十字国際人道研究センター、2014年3月、45-53頁。
 - 木場紗綾・安富淳「日本の国際平和協力活動における民軍協力アプローチの課題：南スーダン国際平和協力業務とフィリピン国際緊急援助活動から」、『国際協力論集』第22巻、第1号、神戸大学国際協力研究科、2014年7月。
 - 花谷厚「南スーダン開発の現状と JICA の協力」、『国際人流』第27巻第1号(通巻320号)、12-17頁。
 - Alex De Waal, “Sizzling South Sudan: Why Oil Is Not the Whole Story,” *Foreign Affairs*, Snapshot, February 7, 2013.
 - Alex de Waal and Abdul Mohammed, “Breakdown in South Sudan: What Went Wrong -- and How to Fix It,” *Foreign Affairs*, Snapshot January 1, 2014.
 - Andrew S. Natsios, “Lords of the Tribes: The Real Roots of the Conflict in South Sudan,” *Foreign Affairs*, Snapshot, July 9, 2015.
 - Jort Hemmer and Nick Grinstead, “When Peace is the Exception: Shifting the Donor Narrative in South Sudan,” June 2015, Clingendael: Netherlands Institute of International Relations.
 - Clemence Pinaud, “South Sudan: Civil War, Predation and the Making of a Military Aristocracy,” *African Affairs*, 113/451, pp. 192-211.
 - Keisha S. Haywood, “Comparing the SPLA’s Role in Sudan’s 1997 and 2005 Comprehensive Peace Agreements: To Spoil or Not to Spoil,” *African Studies Review*, vol.57, No.3, December 2014, pp. 143-165.
 - Douglas H. Johnson, “The Political Crisis in South Sudan,” *African Studies Review*, vol.57, No.3, December 2014, pp. 167-174.
 - Aleksi Ylönen, “Security Regionalism and Flaws of Externally Forged Peace in Sudan: The IGAD Peace Process and its Aftermath,” *African Journal of Conflict Resolution*, vol.14, no.2, 2014.
 - Amir Idris, *Conflict and Politics of Identity in Sudan* (Palgrave/Macmillan, 2005).
 - Ibrahim Elnur, *Contested Sudan: The Political Economy of War and Reconstruction* (Routledge, 2009).
 - International Crisis Group, “South Sudan: Keeping Faith with the IGAD Peace Process,” 27 July 2015.
 - United Nations, Report of the Secretary-General on South Sudan, UN Document

S/2015/655, 21 August 2015.